

一橋大学博士学位申請論文審査報告書

平成 28 年 3 月 9 日

申請者 橋本昌史

論文題目 リモートセンシングの国際秩序 ― 国際管理の不在下で国内規制は担い手になれるか

審査員 山田敦 秋山信将 大芝亮

リモートセンシングとは、衛星から地上を撮影し、得られた画像（データ）を利用者に配布する技術である。この技術は、軍事用にも商業用にも用いる両用技術であるため、国家にとって、安全保障と経済的利益をいかに両立させるが大きな問題となる。さらに、国境を超えて利用される技術であるため、その管理には国際的な取り組みが必要であるにもかかわらず、各国の足並みはなかなか揃わないという問題もある。本論文は、主要国がこうした難題に直面しながら、冷戦終結後の 1990 年代以降、リモートセンシングの国際秩序をどのように模索してきたかを、国際政治理論と実証研究によって明らかにしようと試みるものである。

本論文の優れた点は第一に、先端的テクノロジーを素材に、科学技術と国際政治に関しまさに先端的な研究を志向している点である。リモートセンシングの普及により、かつては軍事機密とされた衛星画像が、今や誰でも簡単に入手できるようになった。一方でこの技術は、農業、資源探査、環境、防災など幅広い分野に利用できるため、今後ますます発展と普及が見込まれる。重要かつ複雑な国際政治イシューについて、類似研究がほとんど見られないなか、本論文が先鞭をつけた意義は大きい。

第二に、ごく新しい研究対象であるにもかかわらず、主要な国際政治理論を適切に援用し、それらを独自に修正・発展させることにより、国際政治研究としての意義を高めていることである。第 I ～ II 章において、国際秩序の形成メカニズムを 4 つの理論に整理しているが、先行研究を広範にレビューした結果をリモートセンシング問題の分析に当てはめる手法は、本論文の大きな学術的貢献の 1 つである。

第三に、体系的かつ緻密な実証研究を志向している点である。第 III ～ V 章において、リモートセンシングをめぐる冷戦終結の前後における国際政治の変化、主要国（アメリカ、イスラエル、カナダ、ドイツ、フランスなど）の規制導入プロセス、そして各国それぞれの規制が国際秩序の形成につながった経緯が詳しく示されている。これらの変遷だけでも十分に読み応えのある研究に仕上がっている。

もとより改善すべき課題も指摘できる。理論研究の部分では、秩序、パワー、利益、規範といった国際政治学上の主要概念について、やや不十分な定義・操作化が行われているきらいがある。ごく新しいイシューを、伝統的な国際政治理論の研究に結びつけるという点が本論文の特色の 1 つであるだけに、ぜひとも改善が望まれる。そのような欠点を申請者が自覚し、今後の研究課題としていることは、口述試験において確認された。

以上のような論文の評価と口述試験の結果に基づき、審査員一同は、申請者橋本昌史氏に一橋大学博士（法学）の学位を授与することが適当であると判断する。